

# 明治初期の日本における米国史の受容について —岡千仞の『米利堅志』を中心に—

閻 秋 君

## はじめに

明治初期における文明開化のもとで、日本では、西洋文明をより深く理解するため欧米の歴史を把握することが求められるようになった<sup>(1)</sup>。殊にアメリカ合衆国（以下「米国」）は、四百年足らずで「未開地」から欧州諸国に比肩する「文明国」に台頭している。それゆえ、米国の歴史を理解すれば西洋文明の沿革を容易に把握できるのではないかという認識が存在しており、1872年の「学制」の頒布を契機に、米国史の翻訳書は一気に出版された。

明治初期の米国受容に関する先行研究は、主に岩倉使節団や明六社の啓蒙思想家を研究対象<sup>(2)</sup>として行われている。しかし、これらの研究は米国の先進性を周知の事実として措定したほか、洋学者による受容経緯の追跡に偏在しており、本論の特徴である未開期を含めた米国史の全体像を捉えようとする視点や、西洋文明の受容に活躍した漢学者<sup>(3)</sup>の動向は看過されているのである。

洋学者による米国史の翻訳は盛んに行われた中で、漢学者・岡千仞（おかせんじん 1833～1914）による翻訳は注目に値する。その理由は、岡は自ら『米利堅志』『法蘭西志』などの翻訳を刊行し、明治初期の小中学校の教科書として採用<sup>(4)</sup>されたほか、梁啓超（1873～1929）により清（1644～1912）に紹介され、清の知識人に広く読まれたからである<sup>(5)</sup>。

『米利堅志』を考察したのは、Yuki Morioka<sup>(6)</sup> や葉楊曦<sup>(7)</sup> の論考であるが、Morioka の考察は、東アジアにおけるジョージ・ワシントン（George Washington, 1732～1799）伝記の一例として言及したに過ぎない。また葉の論文は、書籍の流通事情を通して清における『米利堅志』の普及を考察したが、漢学者の岡が米国に対して如何なる認識を示したのかについては、考察が行われていない。

そのため、本稿は岡による『米利堅志』の翻訳に注目し、明治初期の日本における米国史の受容の一端を考察したい。

## 一、『米利堅志』の翻訳者

本稿の考察対象である岡<sup>(8)</sup>は仙台藩の出身である。彼は1852年に江戸幕府直轄の昌平坂学問所に入学し、儒者・安積良斎(1791～1861)に師事した。在学中、岡は文才を以て詩文掛として頭角を現し、昌平坂学問所書生寮の舎長を任ぜられている。そして仙台藩で戊辰戦争を経験した後、東京府中学校教授、修史館編修官、東京府書籍館幹事(館長)を歴任している。

その一方当時は、伝統知識としての漢学<sup>(9)</sup>が顧みられなくなり、文明開化推進のために漢字廃止まで提唱されている。こうした背景のもとに、漢学者の岡は、洋学者による翻訳を批判し、河野通之<sup>(10)</sup>(1842～1916)と共に米国史を漢文で翻訳し『米利堅志』を出版した。それを契機に、岡は西洋諸国の歴史書の翻訳活動<sup>(11)</sup>を開始し、各国の歴史沿革から西洋文明のあり方を捉えようとしていた。

幕末と明治を体験した岡は、洋学の必要性を認識しながらも、漢学のあり方の問題に直面している。この岡の葛藤を知るには、『米利堅志』における米国文明への理解が格好の指標となり得るのである。

## 二、『米利堅志』の受容背景

『米利堅志』の翻訳内容を考察する前に、まず、『米利堅志』の原書がどのような教科書なのかを紹介したい。

### 1、『米利堅志』の原書

明治初期の日本における米国史の翻訳は、主に米国の教育者カッケンボス<sup>(12)</sup>(George Payn Quackenbos, 1826～1881)の歴史教科書を原本としている。筆者の調査<sup>(13)</sup>によると、該当時代におけるカッケンボスの歴史教科書は、

- (1) *Illustrated School History of the United States* (1857、1864、1868、1869、1870、1877)
- (2) *Primary History of the United States* (1860、1864、1865、1867)
- (3) *Elementary History of the United States* (1870、1872、1873、1879)

が確認できる。内容から見れば、(2)は初等教育の教科書であり、(1)は(2)よりレベルの高い課程に対応した教科書である<sup>(14)</sup>。(3)は(2)の改訂版であり、イラストの地図と練習問題の部分を多少更新したものである<sup>(15)</sup>。

『米利堅志』の原書について先行研究<sup>(16)</sup>では、(3)『合衆国史要 (Elementary History of the United States)』(1870～1879)と指摘されているが、カッケンボスの歴史教科書が日本へ輸入されたのは1867年であり、その説には従えない。さらに(1)と(2)の目次と内容に対照すると、それは(2)と判明する。若干説明すると、『米利堅志』は「科倫布新地ヲ検出ス」(コロンブスの新大陸発見)から筆を起し、「大地体円ナル球ノ如シ。分ツテ兩大陸ト為ス、一ヲ東半球ト曰ヒ、一ヲ西半球ト曰フ」<sup>(17)</sup>と述べている。しかし、新大陸の発見は(1)の最初の内容ではなく、第2章「植民地時代 (COLONIAL PERIOD)」<sup>(18)</sup>に該当する。しかも、訳文に対応する原文は(1)の最初の部分でも該当部分でも見当たらないのである。その一方(2)は、「The Earth is round, like a ball. It contains two large divisions of land, called Continents. One lies in the east, and is called the Eastern Continent. The other lies in the West, and is called the Western Continent」<sup>(19)</sup>という記述から始まり、岡の訳文と一致している。そのため、『米利堅志』の原書は『初等合衆国史 (Primary History of the United States)』と考えた方が妥当であろう。

それでは、該書が如何なる経緯で日本に輸入されたのか。また、どのような時代背景のもとに翻訳されたのか。次節で詳述したい。

## 2、日本における翻訳の経緯

1867年、米国に渡航した啓蒙思想家・福沢諭吉(1835～1901)は、慶應義塾の塾生のために、カッケンボスの歴史教科書を初めとした多数の洋書を購入し、日本に持ち帰ってきた<sup>(20)</sup>。さらに1872年の「学制」を契機に、歴史教科書の翻訳は盛んに行われていた<sup>(21)</sup>。『初等合衆国史』の翻訳書は、

- (1) 青木輔清『亜米利加沿革史略』(中外堂、1872年晩春)
- (2) 渋江保『米国史』(万巻楼、1872年8月)
- (3) 服部照朝『小連邦史直訳』(千松楼、1872年7月)
- (4) 吉田賢輔、須藤時一郎『近世史談初篇』(共立舎、1872年月不明)
- (5) 岡千仞、河野通之『米利堅志』(光啓社・博聞社、1873年12月)

とある通りである<sup>(22)</sup>。(1) 青木輔清は、英語習得の啓蒙書を数多く出版し、英和字典の編集者としても活躍した人物である。(2) 渋江保は西洋書籍の翻訳家、(3) 服部照朝は勸学義塾の英学教授、そして(4) 吉田賢輔は慶應義塾の

塾長を任じ、須藤時一郎（1841～1903）は、共立学舎の英語教授である。以上の翻訳者は皆、英学の啓蒙に活躍した洋学者である。

それに対して、岡は漢学塾（綏猷堂）を設立し、漢学教育に取り組みはじめた。翻訳書出版の順から見れば、岡の『米利堅志』は最後に刊行されているのが注目される。洋学者による翻訳書が既に四冊も出版された中で、漢学者の岡はなぜ『米利堅志』を世に出したのか。その疑問を解くために、次章では『米利堅志』の翻訳意図を検討したい。

### 三、『米利堅志』の翻訳意図

例えば『米利堅志』を舶来した福沢諭吉は、洋書輸入の目的について「史記以テ時勢ノ沿革ヲ顕ハシ、政治以テ国体ノ得失ヲ明ニシ」<sup>(23)</sup>と述べるように、カッケンボスの歴史教科書の輸入は、米国の歴史的沿革を解明することであった。しかし、洋書の翻訳について、福沢は「文章ノ体裁ヲ飾ラズ勉メテ俗語ヲ用ヒタルモ、只達意ヲ以テ主トスルガ為ナリ」<sup>(24)</sup>と述べており、文章の「達意（自分の考えが十分に相手に理解されるように表現すること）」が翻訳の趣旨と考えている。そして福沢と同じように、前述の洋学者たちは文章の意味を分かりやすく伝える文体、いわゆる普通文<sup>(25)</sup>や訓読文<sup>(26)</sup>で翻訳に対応した。

その一方、岡の訳文は漢文体を採用し、他の洋学者の翻訳と『米利堅志』との差異を次のように明確化した。

近時洋学者、専ラ訳述ヲ事トシ、刊行ノ書ハ数ヲ知ラズ。而シテ一書前後数篇ヲ分カチ、零丁破碎、謾ニ体裁無シ。是ノ書ハ僅僅四巻ト雖モ、米  
国ノ草昧ヨリ、一千八百六十年ニ至ルマデ、治乱ノ大略、歴歴遺ス無シ。  
此レ近時ノ訳書ト其撰ヲ異ニスル所以ナリ。<sup>(27)</sup>

（近時洋学者、専事訳述、刊行書不知数。而一書分前後数篇、零丁破碎、謾無体裁。是書雖僅僅四巻、自米国草昧、至一千八百六十年、治乱大略、歴歴無遺。此所以与近時訳書異其撰也。）

このように、『米利堅志』は簡潔であったが米国史における治乱の要点を得ていたという。それは洋学者の訳書と違う特徴だと岡は強調する。日本では、文明を理解することは歴史を理解することだという一種の文明的習慣が存在している<sup>(28)</sup>。そのため、岡が米国史に主眼を置くことは、米国文明の沿革の理解を重視することでもある。次章では『米利堅志』の翻訳状況を分析すること

により、米国文明の沿革に対する岡の理解を考察する。

#### 四、『米利堅志』の翻訳状況

『米利堅志』は、新大陸の発見から出版当時（1860年代）に至るまでの歴史を概略している。本章では、その沿革を追って岡による翻訳状況を分析したい。

##### 1、未開時代

まず、米国の未開についての部分を紹介する。原文で、

In place of these, there were giant trees, thick woods, and rolling prairies. Deer, bears, and wolves abounded. There were fair streams, but no signs of life on them except the busy beaver. Here and there was a rude hut, covered with bark or skins; and dark, half-naked figures stole through the tangled brush-wood.<sup>(29)</sup>

とあるところを、岡は以下のとおり翻訳している。

是ノ時、南北亜米利加全州ハ、草昧未開ニシテ、灌莽叢雜、獸蹄鳥跡、所在充斥ス。土人面ハ紅銅色ヲ帯ビ、裸体跣足、窟居野処、樹皮獸革ヲ以テ屋ヲ構ヘ、僅カニ風雨ヲ蔽フ、殆ド盤古世ノ人ナリ。<sup>(30)</sup>

（是時、南北亜米利加全州、草昧未開、灌莽叢雜、獸蹄鳥跡、所在充斥。土人面紅帶銅色、裸体跣足、窟居野処、以樹皮獸革構屋、僅蔽風雨、殆盤古世之人也。）

翻訳状況を見ると、概ね原文を忠実に翻訳していることが分かる。ただ、訳文の下線部は岡による加筆だと判明する。「草昧未開」というのは文明の秩序が整えていないことである。また、「盤古世ノ人」は天地混沌の状態におり、文明の開化に触れていない存在である。言い換えれば、岡による加筆の部分は、米国は最初から文明未開の「野蛮地」であり、そこの先住民は「野蛮」の存在であるということを強調している。

洋学者による翻訳においても、そうした「野蛮」のイメージを示しているが、漢学者と洋学者の翻訳は、一体どのように異なるであろうか。次節では彼らによる翻訳の相異なる一側面を考察する。

## 2、植民地時代

米国への植民は先住民との衝突に直結していた。「野蛮」の先住民と「文明」の植民者の力関係に対して、洋学者と漢学者が如何なる態度を示しているのか。本節では、ポカホンタスの翻訳を通して彼らの異なる姿勢を検討する。

### (1) ポカホンタスによるスミスの助命

ここでは、英国の植民者のジョン・スミス (John Smith, 1580 ~ 1631) が先住民に捕われ、ポカホンタスという少女に救われる部分を紹介する。

Just as he was about to strike, Po-ca-hon'-tas ( マ マ ) , a gentle Indian girl of twelve years, ran forward, threw her arms about the prisoner, and with tears besought the savages to spare his life. She was the daughter of Powhatan, and the favorite of the whole tribe. (1) Smith had amused her, during his captivity, by making her toys, and telling her about the wonders of nature. She had become fond of the stranger, and now tried to save him. <sup>(31)</sup>

と書いてあるように、ポカホンタスは自ら身を挺してスミスを窮地から救出した<sup>(32)</sup>。なぜ先住民の少女がスミスを助け出したのであろうか。下線部 (1) の説明のように、禁錮中のスミスは、少女に玩具を作ったり自然の驚異を話したりして、少女を楽しませたからである。そのことから、植民者に対する先住民の優位性がうかがえるが、それは果たして忠実に翻訳されているだろうか。まず、岡による翻訳では、

会マ克巴ノ女布嘉本達斯至ル、身ヲ以テ密士ヲ蔽ヒ、哀請甚ダ切ナリ。克巴之ヲ許ス。達斯年甫メテ十二、婉淑ヲ以テ土人ノ愛重スル所トナル。(2) 密士其意ヲ悦ブニ務メ、常ニ達斯ガ為ニ欧州文物ノ美ヲ説ク。達斯心モ窃カニ之ヲ慕フ。土人数ビ密士ヲ虐セント欲スモ、達斯救甚力デ救ワント申ス。<sup>(33)</sup>

(会克巴女布嘉本達斯至、以身蔽密士、哀請甚切。克巴許之。達斯年甫十二、以婉淑為土人所愛重。密士務悦其意、常為達斯説欧州文物之美。達斯心窃慕之。土人数欲虐密士、達斯申救甚力。)

と記述されている。原文下線部 (1) にある "Smith had amused her" に対して、

岡は「密士其意ヲ悦ブニ務メ」という表現で忠実に翻訳している。ただ波線部の "the wonders of nature" は「欧州文物ノ美」と翻訳しているのである。

『英華辞典』（1866）などの幕末・明治初期の辞典は、"nature" の項目について、「性、天地、性情」などの釈義を行っている<sup>(34)</sup>。ここで「欧州文物」というのは、植民を目指すスミスが象徴となるヨーロッパの「文明」<sup>(35)</sup> の意味である。"nature" の意味はいずれも「欧州文物」の意味から離れているが、「野蛮地」に住んでいる先住民の少女は、「欧州文物」に関するスミスの紹介に喜ばれるという岡の翻訳は、「野蛮」が「文明」に惹かれるという認識を示している。

要するに、翻訳者の岡は、植民者に対する先住民の力の優位性を忠実に翻訳しているが、同時に、植民者による「文明」は「野蛮」な先住民を惹きつけるということも認識している。

その一方、上記の原文に対して、洋学者による翻訳書の『近世史談初篇』は、

今行刑者既に棒を振り挙げしに、忽然として十二歳の少女出で来り、身を以てスミスを掩ひ、涙を浮かべ、捕者の命を乞ひけるが、(3) 皆々少女の仁心にや感じけん、遂にスミスを赦したり。扱此少女はポーハタンの子にてありたり。…（中略）…扱此少女の名を問ふに、ポカホントスと云へるとぞ。<sup>(36)</sup>

と記述している。翻訳者（吉田賢輔・須藤時一郎）は、原文（1）の内容を割愛し、ポカホントスによるスミスの助命を、訳文（3）にある少女の仁心に帰着させた。その立場を理解するためには、ポカホントスの英国移住の部分も紹介する必要があるだろう。

## (2) ポカホントスの英国移住

ロルフとの結婚を契機に、ポカホントスは英国へ移住した。原文では、

Rolfe afterwards took his wife to England. She was received with much kindness. Rooms were given her in the palace, and the noblest in the land flocked to see her. Among others, came her old friend, Captain Smith, whose life she had saved. (4) All admired her winning ways.<sup>(37)</sup>

とあるところは、『近世史談初篇』において、以下のように訳されている。

却説（さて）その後ポカホントスは英人ロルフに嫁せしが、遂にロルフと共に英国都府ロンドンに赴きけるに、数多の人來り訪ねて、(5) 皆ポカホントスの美にして且つ嫺たる態度を称讚せり。<sup>(38)</sup>

原文の話では、英国移住後、ポカホントスは英国の貴族に厚遇され、スミスも恩人のポカホントスを訪ね、誰もが彼女の身の上に感心する。下線部(4)の翻訳内容を比較すると、岡訳の「人々皆ナ之ヲ榮トス」<sup>(39)</sup>に対して、吉田・須藤による翻訳は異なる解釈を示している。

まず、ポカホントスが英国の貴族に優遇されたこと、そして、スミスがポカホントスを訪ねることが省かれている。また、下線部(4)にある英国人がポカホントスの身の上に感心することは、訳文の下線部(5)により、英国人がポカホントスの美貌と温和な態度を賞賛することに変容され、英国人とポカホントスの力関係は完全に逆転している。この点を考えると、洋学者の吉田・須藤は、植民者に対する先住民の優位性を認めず、むしろ先住民に対する植民者の優位性を強調しているのではないか。

ポカホントス部分の翻訳から見れば、岡と吉田らは、いずれも「先住民＝野蛮・植民者＝文明の象徴」と見なしている。ここで先住民と植民者の力関係に対してなぜ異なる態度を示しているのか。結論を先に言うと、それは米国文明に対する訳者間の理解の相違にある。

### 3、米国建国後

『米利堅志』と『近世史談初篇』とでは、米国文明の歴史沿革に対しては、それぞれ異なる認識を示している。

まず、『米利堅志』の巻末にある岡の記述を紹介する。それは、仙台藩士・玉虫左太夫(1823～1869)が自ら米国での見聞を岡に教えたことである。それを引用することは、岡がその内容に賛成していると言える。それには、

華盛頓府議政堂宏麗天下ニ冠ス。傍ラニー銅像有リ、(6) 面膚垢穢、被服檻褸ニシテ、殆ド異類ノ如シ。導者指示シテ、是ヲ土蕃人像ト為サント曰フ。華盛頓創建以前、本国衣服風俗、概ネ皆ナ此ノ如シ。頓此ノ像ヲ建ツル、其ノ意以為ラク (7) 本国陋俗此ノ如シ、而シテ後世知見日ニ開ケ、文明日ニ進ミ、殊才異能之士果シテ其ノ間ニ出ルコト有ラバ、 (8) 則チ土

蕃我ト其ノ類ヲ異ニスルヲ以テスト雖モ、尚ホ能ク統領之尊ニ擢任シテ、少シモ係吝スル所ヲ無カラン。嗚呼、孟子舜ノ徳ヲ頌シテ曰ク、賢ヲ立ツル方無シト。頓ガ如キハ其殆ドモ亦タ孟子ノ謂フ所ルノ方ニ無カラン哉。<sup>(40)</sup>

(華盛頓府議政堂宏麗冠天下。傍有一銅像、面膚垢穢、被服襤褸、殆如異類。導者指示、曰是為土蕃人像。華盛頓創建以前、本国衣服風俗、概皆如此。頓建此像、其意以為本国陋俗如此、而後世知見日開、文明日進、有殊才異能之士、果出其間、則雖以土蕃与我異其類、尚能擢任統領之尊、無所少係吝也。嗚呼、孟子頌舜徳曰、立賢無方。如頓其殆亦孟子所謂無方者也哉。)

とある。下線部 (6) と (7) の内容によれば、先住民は「野蛮」な存在でありながらも、議政堂には先住民の衣服風俗の銅像が建てられているというところに着目し、岡は先住民の存在も含めて米国文明の歴史沿革を把握しようとしている姿勢がうかがえる。一方、吉田の「近世史談初篇合衆国総叙」では、

抑も彼国今に在ては興旺繁華の域なれど、(9) 其祖先の始めて欧羅巴より移住せしときは、… (中略) …無知の野蛮の徘徊するを見るのみ。(10) 斯て移住の人々、寒を忍び、飢に耐へ、或は野蛮と戦ひたり。… (中略) …彼国の宇内に雄視し、教化著明の誉を得たるも、畢竟一朝一夕の故にあらず。(11) 祖先より以来、継々承々、自主の心を有し、愛国の志を守り、諸科の学芸を励み、公益の工夫を謀り、以て能許多の艱難中に忍耐せし所の功德によりて、然しめたること得て知るべし。<sup>(41)</sup>

と翻訳している。吉田は「祖先」による開拓の功績を強調しているが、下線部 (9) に「欧羅巴より移住せし」と書いてあるように、その祖先とは、欧州から米国への移住者、いわゆる植民者を意味する。そもそも祖先 (植民者) による文明の移植は、下線部 (10) にある「無知の野蛮」(先住民) との対決である。そのため、「祖先」(植民者) 対「野蛮」(先住民) という構図で、吉田は先住民の存在を米国文明の歴史から除外しているのである。

前述のとおり、「先住民=野蛮」は岡と吉田に共有されているが、米国文明における先住民の位置付けが異なる。吉田の解釈では、米国の繁栄は、一朝一夕で築いてきた業績ではなく、祖先 (植民者) による経営を継承した点に由来

している。例えば米国独立戦争に象徴される「自主」「愛国」の精神でも、下線部(11)のように、それは祖先(植民者)に由来するものと解釈されている。要するに、吉田の認識では、米国は欧州の植民文明を受け継いでいる。そのため、吉田は「野蛮」な先住民を米国文明から排除し、しかも、前節のように先住民を植民者に対する劣等な存在としている。

その一方、岡による記述の下線部(8)では、「土蕃我ト其ノ類ヲ異ニスルヲ以スト雖モ、尚ホ能ク統領之尊ニ擢任シテ、少シモ係吝スル所ヲ無カラン」と述べているように、「土蕃」(先住民)は劣等な存在ではなく、大統領を務めることも認められる。もともと下線部(8)は、ワシントンが人間の平等を求めるための発言であるが、岡は「賢ヲ立ツル方無シ」(賢者を登用するには依怙最眞しない)という視点で、ワシントンによる米国の大統領制を賞賛している。

米国の大統領制に対して、幕末期の横井小楠(1809～1869)は、三代の理想的な王権継承が米国で実現していると理解した。それは儒学者が発しうる最高の賛辞であり、近代の漢学者に与えた影響も非常に大きい<sup>(42)</sup>。『米利堅志』の巻末において、岡も同じように米国の政体を讃えたが、そこで強調されたのは、「万国未ダ曾テ有ラザル之国体」(『米利堅志』巻4、28頁)という独自性である。つまり、欧州(主に英国を指す)の植民地統治から独立した後、米国は欧州と異なる国体を建てたという歴史である。

以上のように、岡が認識している米国は、欧州の植民文明から離れ、米国の独自性を見出した点にある。ワシントンの話で示されているように、先住民を平等に扱う姿勢もその独自性の一端である。その認識に基づいて、岡は前節における植民者と先住民の力関係を忠実に翻訳し、さらに、「野蛮」な先住民を米国文明の構図にも入れたのであろう。

## 五、受容史における岡訳の位置づけ

このような岡の認識は、明治初期における西洋文明の受容の流れから見ると、どのように位置付けられるのであろうか。岡訳の意義として筆頭に挙げられるのは、欧州文明と米国文明との弁別、そして米国の独自性を強調した点である。

漢学者の川田甕江(1830～1896)は、「米利堅志序」において、以下のように本書の意義を述べている。

其レ初メ草昧獐狉、純乎タル野蛮ナリ。二百年前、英人之ヲ據シ、土ヲ闢キ民ヲ移シ、政教ヲ以テ導ク。是ヲ以テ言語文字、服食器用、英ニアラ

ザル物ナシ。(12) 然而ドモ一旦奮起独立シ、乃チ能ク土俗ニ従ヒ時勢ヲ審シ、以テ政体ヲ創立シ、復タ英制ヲ貌襲セズ。況ヤ我ノト米、其ノ開基スル所以ハ、万万同ジカラザルナリ。而ルニ一概ニ之ヲ倣ハント欲スルハ可ナランヤ。(43)

(其初草昧猿狉、純乎野蛮也。二百年前、英人據之、闢土移民、導以政教。是以言語文字、服食器用、無物而不英。然而一旦奮起独立、乃能従土俗審時勢、以創立政体、不復貌襲英制。況我之与米、其所以開基者、万万不同。而欲一概倣之可乎。)

このように「野蛮」である米国は、英国の植民により初めて「文明」を導入され、あらゆる面で英国の「文明」を倣った。しかし、下線部(12)のように、独立後の米国は、従来<sup>1</sup>の風俗を重視するようになり、英国の制度を盲従することなく、自らの政体を設立した。それは漢学者が『米利堅志』に最も注目する点と言える。

欧米を無批判に模倣しようとした明治初期の日本、そして洋学者による米国の歴史教科書の翻訳でも「文明」が「野蛮」を駆逐する図式で一致する。しかし、唯一漢学者の岡の翻訳のみが『米利堅志』に言及された米国先住民の存在を看過せず、そこから米国の政体の独自性を強調している。つまり、米国は当初英国の「文明」を模倣したが、最終的にはそこから離れ政体において独自性を生み出したが、それに着眼した訳者は洋学者ではなく、漢学者であったのだ。

今回の考察は、共通する原書を漢学者・洋学者がそれぞれ訳出した差異という微細な問題に過ぎない。しかし、一見些細に思われる解釈の齟齬の中には、洋学・漢学双方が持つ歴史認識の相違が垣間見える。洋学者による野蛮対文明という単純な図式ではなく、漢学者——少なくとも岡千仞は、西洋文明を絶対化せず自らの独自性を重視する姿勢が見られるのではなからうか。

## おわりに

以上、本論では『初等合衆国史 (Primary History of the United States)』の岡千仞による翻訳『米利堅志』から、彼の米国史受容を考察した。

本論の内容を約言すると以下の通りである。

先住民は米国文明の歴史から除外されるものと認識した吉田に対し、岡は、先住民の歴史は「野蛮」の範疇に入れつつも、それ自体も米国文明の歴史に包括されるとした。この先住民の位置付けに関する理解の相違は、吉田と岡とい

う両者の見解の相違に由来したものと考えられる。

つまり、洋学者たる吉田からみれば、米国文明は植民者たる欧州文明の継承者であったが、岡にとっての米国文明は、欧州文明から離れその独自性を作り出したのである。その理解は、当時の日本においても、自国の独自性を重視するという文明受容のあり方の反映を示す一端とも思われるほか、当時の漢学者が経験した明治以降の社会情勢の反映、もしくは明治時代における文明批判の一環とも思われるのではなかろうか。

本稿では、岡訳における欧州文明に対する米国の独自性への注目を考察したが、欧州、殊に英国と米国の植民地関係に対する岡の認識は未だ検討されていない。その課題に関する考察は、明治初期における西洋と東洋の国際秩序観の相剋を解明することができる。こうした作業は今後の課題としたい。

付記：本稿は、中国国家留学基金管理委員会の研究助成を受けた研究成果の一部である。

#### 注

- (1) 加藤周一「明治初期の翻訳—何故・何を・如何に訳したか—」（加藤周一、丸山真男校注『翻訳の思想 日本近代思想大系 15』、岩波書店、1991、354～356頁）を参照。
- (2) 岩倉使節団に関する先行研究はすでに多く存在し、その西洋経験が明治国家の建設に役割を果たしたことが一般に認識されている。宮永孝『アメリカの岩倉使節団』（筑摩書房、1992）、田中彰『明治維新と西洋文明：岩倉使節団は何を見たか』（岩波書店、2003）を参照。また、福沢諭吉をはじめとする啓蒙思想家の米国受容に関しては、松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』（岩波書店、1993）、神奈川大学人文学研究所編『「明六雑誌」とその周辺—西洋文化の受容・思想と言語』（御茶の水書房、2004）などが挙げられる。
- (3) ここで言う漢学者とは、吉田公平の定義を借りれば、近代の学制が整備されていた中で、官学及び私学に職を奉ずる形で漢学を専門とする教育者・研究者とされている。吉田公平「近代の漢学」（『日本思想史学』第39号、2007、11～12頁）を参照。
- (4) 海後宗臣、仲新編『近代日本教科書総説 目録篇』（講談社、1969、391頁）を参照。
- (5) 日清戦争後、西洋知識の重要性を認識した梁啓超は『西学書目表』を著し、日本における西洋知識の翻訳書を紹介した。『米利堅志』は歴史翻訳書として梁啓超により挙げられ、1898年に清国の新学書局により複製された。中田吉信「岡千仞と王韜」（『参考書誌研究』第13号、1976、13頁）を参照。

- (6) Yuki Morioka, *The Reception of Modern Biography in East Asia: How Washington's Biographies were translated*, Kyoto University Research Information Repository, 2015, pp.27~50.
- (7) 葉楊曦「書籍環流与知識転型－以岡千仞漢訳西史為中心」(『東亜觀念史集刊』第11号、2016、271～308頁)
- (8) 岡の生涯に関しては、宇野量介『鹿門岡千仞の生涯』(岡広、1975)を参照。
- (9) 漢学は主に明治期という時代に限定された用語として考えられる。また、漢学という言葉自体には、すでに対概念としての洋学・和学が意識されている。樋口浩造「近代の漢学」(『日本思想史学』第39号、2007、1～2頁)を参照。
- (10) 共訳者の河野も仙台藩出身であり、幕末期に岡に師事し、漢学を修めた。明治維新後、河野は洋学塾の明治新塾において英語を勉強した。河野は助教授として、師の岡と共に東京府中学校で働いたが、後に漢学教育から去り、陸軍省に転勤した。岡濯「荃汀遺稿序」(河野通之『荃汀遺稿』巻1、河野有、1922、「前序」2～3頁)、館森鴻「荃汀遺稿後序」(前掲書『荃汀遺稿』巻3、「後序」1～2頁)を参照。
- (11) 岡による翻訳活動というのは、翻訳の原稿に漢文の潤色を行うことである。原文「通之善読洋書、取米国史、立課翻訳。每一訳出、付余潤色」。岡千仞「米利堅志 例言」(『米利堅志』、光啓社・博聞社、1873、「例言」1頁)
- (12) カッケンボスはクワッケンボスとも書く。彼の生涯に関しては、町田俊照「クワッケンボスについて」(『日本英学史研究会研究報告』第72号、1967、11～18頁)を参照できる。
- (13) 前掲中田吉信の論考は、東京都立日比谷図書館(現在東京都立図書館)の蔵書に基づき、カッケンボスの教科書の書誌情報を挙げた。(同注5、20頁)を参照。現在では、インターネットを通じて検索できるデータベース(<https://catalog.hathitrust.org/Search/Home>)は公開されている。筆者の調査結果は上記のデータベースによる。
- (14) "when a more extended course is desired, it may with advantage be followed by the author's *Illustrated School History of the United States*." G.P.Quackenbos, *Primary History of the United States*, D.Appleton Company, 1867, p1.
- (15) "In the present edition, the former text remains unaltered; the form of the book has been changed, new maps have been introduced, tables with questions on them have been added." G. P. Quackenbos, *Elementary History of the United States*, D.Appleton Company, 1870, p1.
- (16) 田中彰・宮地正人編『日本近代思想大系 13 歴史認識』(岩波書店、1991、111頁)を参照。
- (17) 原文「大地体円如球。分為兩大陸、一曰東半球、一曰西半球」。前掲書『米利堅志』巻1(同注11、1頁)引用文の書き下し及び句読点は筆者による。また、旧字体を新字体に改める。下同。
- (18) G.P.Quackenbos, *Illustrated School History of the United States*, D.Appleton Company, 1864, p43.
- (19) 前掲書 *Primary History of the United States* (同注14、5頁)

- (20) 「四年ヲ経テ慶應三年ノ春、論吉ハ又『米国』に航シ、此度ハ前ニ比スレバ資本モ豊ニシテ、多分ニ英書ヲ買入レ、一私塾生徒ノ用ニ供シテ不自由ナキ程ノモノヲ携帰タリ。則チソノ書類ハ辞書ノ外、英氏ノ經濟論、『クワッケンボス』ノ窮理書、文典、米國史、『パーレー』及ビ『グードリチ』ノ万国史、英國史等。」福沢論吉「三田演説第百回ノ記」（初出 1877）（『福沢文集 2 編』巻 1、中島精一出版、1879、26～27 頁）
- (21) 「学制」発布の当時、文部省の教科書は整備されていないため、西洋教科書の翻訳書は実際に民間により数多く出版された。尾形裕康『学制成立史の研究』（校倉書房、1973、423～436 頁）を参照。
- (22) 原書の日訳については、前掲中田吉信の論文は、『小連邦史直訳』、『亜米利加沿革史略』の存在を指摘した。ただし、指摘された『合衆国史略』はカッケンボスの『絵入合衆国史教科書 (*Illustrated School History of the United States*)』の訳書である。（同注 5、20 頁）を参照。その他の訳書として、筆者は『米國史』と『近世史談初篇』を発見した。
- (23) 福沢論吉「西洋事情卷之一 小引」（初出 1866）、（『西洋事情初編』巻 1、慶應義塾出版局、1872、2 頁）
- (24) 前掲「西洋事情卷之一 小引」（同注 23、3 頁）
- (25) 明治時代の文体は漢文体から普通文・訓読体、さらに口語体へと変化した。普通文は雅俗を折衷し、漢文訓読の語法が基礎になり、漢字仮名交じりで書かれる文体である。岡本勲「明治普通文と漢文訓読語」（『中京大学文学部紀要』第 18 (2) 号、1983、154～177 頁）を参照。
- (26) 江戸時代、訓読は漢文の解説と作成の技法として意味を持っており、漢文と訓読文は一体のものとして機能していた。しかし、訓読のリズムが大衆的に広がりを得ていくのと同時に、漢文と訓読の分離が始まり、漢文から訓読文が独立し始めたのである。齋藤希史『漢文脈と近代日本—もう一つのことばの世界』（日本放送出版協会、2007、78 頁）を参照。
- (27) 前掲「米利堅志 例言」（同注 11、「例言」2 頁）
- (28) 丸山真男、加藤周一『翻訳と日本の近代』（岩波書店、1998、63～68 頁）を参照。
- (29) 前掲書 *Primary History of the United States*（同注 14、6 頁）
- (30) 前掲書『米利堅志』巻 1（同注 11、3 頁）下線は筆者による。下同。
- (31) 前掲書 *Primary History of the United States*（同注 14、34 頁）数字は筆者による。下同。
- (32) ポカホンタス物語の信憑性を史料から検討する余地があるが、本稿は原文と訳文の比較を目指すため、その信憑性については割愛する。佐藤円「史料が語るポカホンタス」（『大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要』第 16 号、2015、72～99 頁）を参照。
- (33) 前掲書『米利堅志』巻 1（同注 11、11 頁）
- (34) "nature" の翻訳語として、自然界の意味を表す「自然」の語が成立されるのは、1890 年代からである。柳父章『翻訳語成立事情』（岩波書店、1982、127～131 頁）

を参照。

- (35) 明治初期、「文明」は「未開・野蛮」に対置する用語として用いられた。「文明」の概念の変容については、鈴木修次『文明のことば』（文化評論出版、1981、33～68頁）、西川長夫『国境の越え方—比較文化論序説』（筑摩書房、1992、172～210頁）を参照できる。
- (36) 吉田賢輔、須藤時一郎『近世史談初篇』巻1（共立舎、1872、23頁）中略と句読点は筆者による。また、旧仮名を新仮名に改める。下同。
- (37) 前掲書 *Primary History of the United States*（同注14、37頁）
- (38) 前掲書『近世史談初篇』（同注36、25頁）
- (39) 原文「落尔布与達斯婦英、英王築室於宮中迎之、恩遇太渥。密士亦来謝旧恩、人皆荣之」。前掲書『米利堅志』巻1（同注11、13頁）
- (40) 前掲書『米利堅志』巻4（同注11、28頁）
- (41) 吉田賢輔「近世史談初篇合衆国総叙」（前掲書『近世史談初篇』、同注36、「叙」3～4頁）
- (42) 松浦玲「幕末思想家の米国認識—横井小楠を中心に—」（学芸総合誌・季刊『環—歴史・環境・文明』第8号、藤原書店、2002、150～153頁）を参照。
- (43) 川田甕江「米利堅志序」（前掲書『米利堅志』、同注11、「前序」3頁）

（東北大学大学院）